



### アトロピンの受難

本コラムの執筆も2巡目となった。前回の続報をお伝えしようと思う。

大学で学部3年生100人弱を対象に薬理の授業を担当して6年経つ。期末テストのなかの救済問題として「授業を通じて最も印象に残った化合物名とその理由を記せ」と毎回問うている。初年度ランキング1位は圧倒的にクラレ（神経筋接合部遮断作用を示すツボクラリンを含んだ矢毒）、2年目はアスピリン、3年目以降もアスピリン人気は依然高いが、このころから対象となる化合物が非常に多岐にわたりはじめ、クラレもその中に吸収された。以前のコラムではこの現象を、1) PowerPointを主とした授業形態をとるためにライブ感が増し、その分こちらの気分・ノリに合わせ、発する一言一言が学生に大きな影響を与えてしまうことが時におこる、2) その一方で、年毎にこちらの波も落ち着いてきて、学生が自分の興味に従って選択肢を拡げつつある、と解釈していた。従って、鉄板ネタのアスピリン（パファリンのやさしさの正体がわかってうれしいらしい）をランキング上位としてこの傾向は続くだろうと考えていた。

ところが最新の結果で、その読みは大きくはずれる。中枢作用薬が大躍進をみせ、キング・アスピリンを抜き去り、5割を超える支持を集めた。なかでもドパミンスタビライザーであるアリピプラゾールは単独でアスピリンにせまる健闘ぶりだ。高評価のポイントはその作用機構のバランスの良さ、だそうだ。パーキンソン病治療に用いられるエンタカポンやカルビドパなど、それ自体が作用を発揮するのではなく、基になるレボドパの分解を防いで作用を増

強するという縁の下の力持ち的作用は女子に好感度だったようだ。マイケル・ジャクソンがらみでフルマゼニル、ロラゼパムものびた。MARTAに分類されるミラクルメディスン・クエチアピンの開発戦略（低い副作用を実現するため、わざと低親和性化合物を開発ラインにのせた）は優秀な学生にうけがよかったみたいだ。面白いのはバルビタール。その構造がゴキブリにしかみえないから、との意見が2票。常々構造を重視した授業を心がけているのでこの着眼点はある意味うれしい。

でもなぜ中枢なのか。中枢作用薬に特に入魂した覚えもない。抗高血圧薬だって、抗糖尿病薬だって相当な種類を、そこそこのネタとともに紹介したはずだ。おまけに、1年目であれだけの人気を博したクラレは今回ゼロ。確かに近頃テレビで脳に関する特集を見かけることも多いが、ここ1年にはじまったことではないし、全く訳がわからない。どうも根底に、学生間に潜む得体の知れないトレンドとでもいうべきもの（学生間でくだらない遊びが一気にはやったりするアレ）、が関係しているように思えて、手近なところから潜入捜査を試みた。すると意外に早く収穫があった。バルビタールゴキブリ説は学生の間で小規模ながら話題になっていたというのだ。期待が膨らむ。しかし、その後核心に触れる、つまり中枢作用薬全体の支持を押し上げた理由に関する収穫はなく、結局のところ要領を得ない。

そこで方針を一転、原因を考えるのは止めて、純粋に学生の興味の対象の変遷に身を任せて楽しむスタイルに変更することにした。学生にサイエンスに興味を持ってほしい、そのためには魅力的な授業をすることが大事、そのなかでうまく種を見つけてくれれば放っておいても学生は自ら勉強する、そう思って、一体学生は何を、どんなコンセプトや小話を、面白いと思うのか知りたかったのだが、やはり気楽に眺めているほうがこちらも楽しい。

ちなみに以前のコラムの主役、アトロピンは珠玉の1票。理由は、名前がかわいいから、だそうだ。

(空)